



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Effects of Interdependence Frame and Affective Entertainment Experience in the Context of Parasports on Attitudes toward People with Disabilities [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	塩梅, 弘之
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(国際広報メディア)
Dissertation Number	甲第15617号
Issue Date	2023-09-25
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/90903">https://hdl.handle.net/2115/90903</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	doctoral thesis
File Information	Hiroyuki_Shioume_review.pdf, 審査の要旨



## 学位論文審査の要旨

国際広報メディア：博士（国際広報メディア）

氏名：塩 梅 弘 之

審査委員	主査 准教授	張 ジュヒョク
	副査 教授	辻 本 篤
	副査 特任教授	伊 藤 直 哉

## 学位論文題名

### **Effects of Interdependence Frame and Affective Entertainment Experience in the Context of Parasports on Attitudes toward People with Disabilities**

(パラスポーツにおける共生フレームとエンターテインメントの感情経験が障害者に対する態度に及ぼす効果)

共生社会はオリンピック・パラリンピックが目指す社会的目標であるが、障害者競技団体の広報において、障害者への偏見解消を目的としたメディアコンテンツ制作は、社会的に繊細な問題を含むため、その制作方法論を巡って苦心が連続してきた。このような課題を解決する糸口として、フレーミング理論がある。フレーミングは、情報内の特定要素の着目により、特定の認知処理や社会的態度形成を効果的に促進させるという考え方である。健常者と障害者の共生に関するメディアフレームとして「共生フレーム」と呼ばれるフレームが存在しているが、その実証的効果については未だ十分に検証されていないのが実情である。

日本におけるパラリンピックのメディアコンテンツが徐々に一般的となり、障害者スポーツや障害者問題への意識が向上するにつれ、「エンターテインメント性」の果たす役割が認識され始めてきた。快樂的なエンターテインメント経験と比較し、有意味な結果をもたらすエンターテインメントであるユーダイモニック・エンターテインメント・コンテンツは、深い思考の導因となる有意味経験を引き起こすと言われている。このようなコンテンツは向社会的な行動に繋がり、ステレオタイプの思考の低減を導くことが先行研究で示されている。有意味経験を引き起こす手がかりとして、しばしばパラアスリート写真の「笑顔」が取り上げられる。笑顔が手がかりとして働き、コンテンツにユーダイモニックなエンターテインメント性があるものとして認識させる可能性が言及されている。しかしながら、先行研究においても、この笑顔効果の実証的検証は十分に行われているとは言い難い。さらに、フレーミ

ング効果とエンターテインメント効果に関する心理的プロセスや実証的関連性も十分に検証されていない。本研究においては、信念内容の変容もフレーミング効果の一つであるとして、以上の関係性変化を総合的に検証している。

以上のような博士論文内容に関して、本審査委員会では、以下のような質疑応答が行われている。まず方法論に関して、第一に刺激として与えられるアスリート情報に関して、アスリートに関する事前知識をどのように処理しているか、第二に刺激として与えられるアスリートのフレーム情報の多さに関してどのようなマニピュレーション・チェックを行っているのか、第三に障害者問題への回答でしばしば現れる規範バイアスをどのように処理しているのか等の質問が行われ、回答と議論が行われた。また内容面に関しては、フレーミング理論を用いた理由、障害者とLGBTQとの関連性、アスリート写真選択に関する本論考の実務的貢献等が議論された。以上の方法論と内容に関する議論において、筆者からは適切な説明と解説が行われたことをここに記しておく。

以上の審査結果をもとに、本論考に対して審査委員会は慎重な議論と検討を行った結果、本研究の学問的意義、本論考の方法論的信頼性と妥当性は十分であり、学問的貢献、実務的貢献においてもその意義や波及効果は十二分に高いものと判断した。そこで、本審査委員会は、本研究を北海道大学博士（国際広報メディア）に相応しい学術論文であることを全会一致でここに認め、その結果をここに報告するものであります。